

岐阜県古代・中世寺院跡総合調査について

ABOUT THE RESEARCH OF ANCIENT AND MEDIEVAL TEMPLE SITES IN GIFU PREFECTURE

日置 真穂（岐阜県文化財保護センター）

HIOKI MAHO

(GIFU CULTURAL PROPERTIES PROTECTION CENTER)

岐阜県では、平成30年～令和4年度にかけて岐阜県古代・中世寺院跡総合調査（以下、「総合調査」という。）を実施し、令和5年3月に総合調査報告書を刊行した¹⁾。報告書は、『全国遺跡報告総覧』からダウンロードが可能である（<https://sitereports.nabunken.go.jp/130846>）。

筆者は、5年間の調査期間のうち、約4年を調査担当職員として従事する機会を得た。本稿では、調査の目的や方法、成果の概要について紹介する。

1. 調査の目的

岐阜県には、白山信仰の三馬場の一つで美濃における天台宗信仰の拠点である郡上市長瀧寺や、重要文化財を多数所有する「美濃の正倉院」とも呼ばれる揖斐川町横蔵寺、身毛氏の氏寺として建立されたと考えられる関市弥勒寺跡など、多数の著名な古代・中世寺院（以後、寺院跡を含んで「寺院」という。）が存在する。さらに、近年では御嵩町願興寺跡など、各市町村教育委員会等によって実施された発掘調査により、寺院に関する重要な成果が挙げられつつあり注目されている。各地域の寺院については、県内や周辺地域の他の寺院と比較し、その寺院の特徴や地域における歴史的位置付けを示すことが求められるが、これまで岐阜県全域を見渡した古代・中世寺院に関する調査・研究は少なく、その数や規模、実態については明らかとなっていたなかった。

また、県域のおよそ8割を山地が占める山岳県の岐阜県らしく、山間部に立地する古代・中世寺院の存在が県内の各地で知られていた。しかし、県内でのいわゆる「山寺」の実態や様相について触れた先行研究と

しては大下永氏の研究²⁾等があるものの、近隣県である愛知県・静岡県・滋賀県のように県若しくは特定の地域全体における山寺の分布状況や実態を示した報告はなされていなかった。加えて、遺跡が山間部という立地にあることから、崩落及び土砂災害等の自然災害や、開発行為等の影響を受けやすい環境にあり、その所在位置と範囲を把握することが急務であった。

そこで、岐阜県内の古代・中世寺院の分布状況を明らかにし、所在位置のほか、寺院の成立時期や沿革等の内容を調査・整理して埋蔵文化財包蔵地として周知すること、そして開発事業計画と埋蔵文化財保護との調整や保存・活用のための基礎資料を作成することを目的として、総合調査を実施した。

2. 調査体制

本調査は、岐阜県文化財保護センターが調査主体及び事務局、岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課が事務局補佐を担当した。調査担当職員数は各年度4名、課長・担当係長が各1名であった。

また、調査の方法やその成果について指導・助言を得るために、「岐阜県古代・中世寺院跡総合調査検討委員会」（以下、「検討委員会」という。）を設置した。その構成員は、表1のとおりである。検討委員会は、平成30年度に3回、令和元～3年度は各2回、令和4年度は1回実施し、この他に必要に応じて現地での指導も賜った。

3. 調査の方法と流れ

本調査の対象は、県内に所在する古代及び中世に成

表1 検討委員会委員

氏名	所属
三輪 嘉六氏 (委員長)	文化財保存支援機構、山梨大学
菱田 哲郎氏 (副委員長)	京都府立大学
上川 通夫氏	愛知県立大学
村木 二郎氏	国立歴史民俗博物館
林 正憲氏	奈良文化財研究所
藤岡 英礼氏	滋賀県栗東市教育委員会

立した寺院を主な対象とし、寺院に関する遺構や施設（平坦面、法面、土壘、石積み、塚、岩窟、池、谷、滝、墓域等）についても調査対象とした。対象年代は江戸開府の1603年以前としたが、1604年以降の近世成立とされる寺院についても、それ以前に遡る寺伝や仏像等の美術工芸品の存在から中世以前に遡る可能性があることを考慮し、調査の対象に含めた。

調査対象地は、県内全市町村（21市19町2村）である。各調査年度における調査対象地は、調査員数や調査時期を考慮し、ひとまず現存寺院の数から対象寺院数が概ね均等になるよう市町村を割り振った。その結果、平成30年度に1市2町、令和元年度に5市7町、令和2年度に6市5町1村、令和3年度に9市5町1村を対象地域とし、令和4年度には報告書の作成及び編集等を実施した。

調査は市町村ごとに基礎資料調査、現地確認調査、地形観察図作成の順に実施し、中津川市・飛騨市・揖斐川町では内容確認調査も実施させていただいた。以下に各調査の方法について記す。

（1）基礎資料調査

各寺院について、自治体史や寺史等の文献資料、発掘調査や遺跡詳細分布調査資料、各地域や社寺に残る伝承等の資料を参考し、寺院の沿革やこれまでの調査歴、所蔵する建造物や美術工芸品、絵図、文献等を調べ、1か寺の情報をまとめた「調査票」を作成した。寺院数の把握は、岐阜県環境生活部県民生活課より提供を受けた平成30年度時点の現存寺院の一覧を基にし、寺院遺跡や廃寺等は一覧の最後尾へ隨時追加した。作成した調査票は、各市町村の文化財担当者へ照会し、

所在不明寺院の情報や文献資料等に記載のない新たな情報の提供等の協力を得て、その情報を調査票に加筆・修正を行った。基礎資料調査の結果、県内合計3,464か寺の調査票を作成することができた。

（2）現地確認調査

原則として、調査票を作成した全ての寺院を対象に、現地確認調査を行った。現存寺院では、御住職や御寺族の方に聴き取り調査を行い、調査票に記載した事項の他に寺伝がないか、転宗歴は正しいか、境内に中世以前に遡る遺構や遺物、建造物等はないか等を伺った。特に、寺院の移転歴や旧跡の位置については注意深く聴き取りを行い、時には旧跡へ案内していただくこともあった。廃寺や寺院跡では、その正確な所在位置及び範囲と周辺の地形、現況、遺構や遺物の残存状況を確認した。基礎資料調査の段階で所在地不明の寺院についても、可能な限り地元の方に聴き取りを実施した。聴き取りによって、所在地が明らかになったり、地域での口承・伝承でのみ知られていた寺院の存在が初めて明らかになった場合もあった。

（3）地形観察図作成

現地確認調査の結果に基づき、山間部に立地する古代・中世寺院のうち、寺域を構成する平坦面を確認したものについて測量を実施した。これに該当する現存寺院についても、成立が古代・中世に遡る可能性がある寺院は作図の対象とした。測量では、これまで城郭研究で用いられてきた縄張り図の手法を山寺に応用した藤岡英礼氏の先行研究³⁾や、同氏が所属する滋賀県栗東市教育委員会が実施した近江の山寺の悉皆調査成果⁴⁾を参照した。総合調査の中で作図した図面は、現在の地表面の観察結果であることを踏まえて、「地形観察図」と呼称した。

当初は、1/1,000に拡大した1m間隔のコンター図を下図とし、その上にマイラー用紙を重ねて測量に使用した。GPS受信器を用いて最初の測点（現在位置）を確認し、レーザー距離計や方位磁針で次の単点までの距離及び方角を計測することを繰り返して作図を行ったが、この方法だと各作業に時間がかかることに加え、レーザー距離計の使用が作図対象地の自然環境や天候に左右され、相当な時間を要した。



写真1 地形観察図作成の様子

そこで、近年山城や古墳などの遺跡調査でその有効性が認知されている航空レーザー測量成果を下図とした。使用したのは、岐阜県林政部治山課から貸与を受けた赤色立体図や、岐阜県森林研究所が公開しているCS立体図である。平坦面の上端や下端は立体図にすでに表現されているため、現地で地表面を観察しながら描き、立体図に表現されないような軽微な盛り上がりや起伏（基壇状の高まり、土壘、参道から平坦面への出入口等）についてはレーザー距離計や巻尺を使用するなど、作業にメリハリをつけることで作図の効率を大幅に上げることができた。また、現地確認調査時に立体図を使用することで、山中での遺構の広がりを事前に把握し、計画的に踏査を行うことができた。

報告書へは、寺院同士の規模や構造の比較がしやすいよう1/2,500の縮尺で統一し、寺域が収まらない場合は任意の縮尺の全体図も合わせて掲載した。以上のような手法により、県内127か所の地形観察図を作成した。

(4) 内容確認調査

総合調査では、縄張り図等を作成し、地域において重要と考えられる寺院のうち、当該市町村及び地元から調査の了解が得られ、かつ、委員会にて承認された寺院について、トレンチ調査にて内容確認調査を実施した。詳細については報告書を参照されたいが、以下に各調査成果の概要を説明する。

中津川市苗木所在の龍渓寺跡は、成立時期不明で、廢仏毀釈によって廃絶したとされる寺院であり、独立丘陵の南側山腹に寺域が広がる。調査の結果、「南無

阿弥陀仏」の六字名号がある巨石の直下に据えられた15~16世紀の石塔基部や土坑等を確認した。

飛騨市太江所在の寿楽寺廃寺跡は、飛騨国最古の伽藍として知られる古代寺院で、平成10~12年度に財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した発掘調査では多量の古代瓦とともに講堂基壇跡と回廊跡を確認した。今回の調査では、現寿楽寺の北側で、回廊跡の内側に位置する2つの基壇状の高まり（推定金堂跡及び推定塔跡）に計5か所のトレンチを設定した。調査の結果、基礎地業時の堆積土や、推定塔跡で塔廃絶後の堆積土を確認し、古代瓦のほか、鶴尾や壁土の可能性がある破片等が出土した。また、寿楽寺廃寺跡の北側の山麓で遺物分布調査を実施した結果、7~8世紀代の須恵器片を多く採集し、故意に打ち欠いたと思われる破片が集中するエリアや、在地産以外の須恵器が集中するエリアを確認した。

揖斐川町谷汲所在の旧横蔵寺跡（総合調査報告書では「横蔵寺旧境内」とする）は、延暦22（803）年に最澄による開山と伝わる寺院で、標高約400mの山腹鞍部に旧跡の遺構が展開する。今回は、以前より存在が知られていた本堂跡・池跡・塔跡・仁王門跡の地形測量調査と、地形観察図の作成範囲で遺物分布調査を実施した。遺物分布調査の結果、本堂跡で9世紀後半の灰釉陶器を、その他の場所で13世紀前半の山茶碗等を採集した。

4. 調査の成果

5年間に渡る調査の結果、基礎資料調査では3,464か寺を対象とし、そのうち古代成立寺院は393か寺、中世成立寺院は1,525か寺で、合計1,918か寺を確認した（表2）。ここでは、主な調査成果として、報告書の総括から抜粋して紹介する。

初めに、県内の古代・中世寺院の実態について客観的なデータを示すことを目的に、基礎資料調査や現地確認調査で得た各寺院の沿革に関する年代や、成立時の立地状況を集計した。なお、寺院の成立時期等については、各自治体史や発掘調査等の成果に加えて、各地域や各社寺に残る口承及び伝承も含めた。

表2 岐阜県における成立時代別寺院数

時代\圏域名	岐阜圏域	西濃圏域	中濃圏域	東濃圏域	飛騨圏域	小計
飛鳥	23	6	8	2	9	48
奈良	30	33	28	3	8	102
平安	46	79	36	12	8	181
古代(細分不能)	12	24	7	8	11	62
古代寺院小計	111	142	79	25	36	393
鎌倉	56	41	35	11	22	165
室町	216	194	141	50	96	697
安土桃山	44	50	69	34	12	209
中世(細分不能)	103	175	81	51	44	454
中世寺院小計	419	460	326	146	174	1525
古代・中世寺院合計	530	602	405	171	210	1918
参考寺院等						
近世(江戸)	172	187	148	124	31	662
時期不明	179	173	152	106	68	678
近代以降等	73	50	35	35	13	206
近世以降等寺院小計	424	410	335	265	112	1546
対象寺院合計	954	1012	740	436	322	3464

表3 時期別の成立等寺院数

西暦\内容	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700
成立	36	82	25	62	11	16	24	5	5	10	51
転宗				3	1	1			1	37	14
移転		2	2		1			1	1	2	3
廃絶(火)				2	1			2	4	1	2
廃絶(他)				1				1	1	1	1

表4 時期別の立地別寺院数

西暦\内容	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	合計
平地	24	20	7	27	3	3	9	1	5	16	23	14
山麓	5	19	6	4	3	1	2		1	11	2	12
山腹・山頂	2	6	7	6	1	2	5	3	2	1	3	4
不明	1											1

(表2～4は岐阜県文化財保護センター2023から抜粋)

沿革の年代の集計方法は、各寺院の成立・転宗・移転・廃絶（廃絶は兵火による焼失とその他の要因によるものを分けて集計した。）の年代について、650年から1750年までを50年単位に区切り、集計した（表3）。その結果、発掘調査成果や伝承等を含めて7世紀から寺院の成立を確認でき、8～9世紀前半までは新たな寺院の成立が相次ぐが、9世紀後半から12世紀前半までは成立数が減少する。12世紀後半から15世紀前半は、土岐氏が美濃国で勢力を拡大させ、積極的に寺院の造営を行ったことから再び成立数が増加する。15世紀後半には新たな寺院が爆発的に増加し、転宗を行った寺院も急増するが、これは蓮如の布教活動の影響によるもので、天台宗から真宗への転宗が圧倒的に多い。これまで各自治体史等で語られてきた県内の仏教史のイ

メージを、具体的な寺院数で提示することができた。

立地の状況については、成立時の所在地が明らかな1,594か寺について、成立時期毎にその立地を平地・山麓・山腹及び山頂(尾根上を含む)の3項目に分けて集計した(表4)。平地への立地が954か寺で全体の60%、山麓への立地が533か寺で全体の33%、山腹及び山頂への立地が107か寺で全体の7%という結果となり、全体のおよそ40%が山地に立地していることが明らかになった。ほぼ全時期を通じて平地への立地数が多いが、7世紀後半では、岐阜・飛騨圏域において山地への寺院の造営を確認でき、8世紀前半には山地に立地する寺院が平地寺院の数を超えており、寺院の成立自体が少ない11世紀においても山腹への寺院造営が認められ、13世紀後半から15世紀前半では、平地と山地に

造営される寺院数の差がほとんど見られなくなる。

また、地形観察図を作成した寺院から、岐阜県における山寺の特徴を見出そうと空間構造の検討を行った。作図を行った寺院には、山腹から山麓にかけて複数の平坦面が展開する大規模な寺院もあれば、堂宇が1軒建つ程度の狭い平坦面が2～3面残るような小規模な寺院もあるが、今回の検討には本堂等の主要堂宇の位置が遺構や絵図等の資料から推定でき、その周囲に坊院跡と推定できる小規模な平坦面が残る事例を対象とした。検討の結果、総合調査成果から見出せる本県の山寺の特徴として3点が挙げられる。

1点目は、先行研究で指摘されている山寺の空間構造の主な傾向が、本県においても概ね確認できることである。古代山寺の空間構造について比較検討を行った久保智康氏は、「ほとんど例外なく、寺地の最奥に仏地的性格の強い堂舎が営まれている」という明瞭な傾向を示した⁵⁾。今回地形観察図を作成した寺院のはほとんどが、平坦面群の最奥高所に本堂跡若しくは群の中で最も広い平坦面が位置し、その手前や周囲に中小規模の平坦面群が展開する事例であった。また、藤岡英礼氏は、本堂の正面から山麓方向に向かって伸びる直線参道は畿内近国で15世紀以降に普及することを明らかにしている⁶⁾が、古代成立と伝わる垂井町・養老町・大垣市境に位置する栗原九十九坊跡や池田町弓削寺でも、時期が下るにつれて直線参道を中心に寺域を拡大・再興する様子がうかがえる。

2点目は、飛騨圏域に限って、例外的な寺域展開をする寺院を確認できることである。下呂市大威徳寺跡は、下呂市教育委員会の発掘調査によって、平安時代末から鎌倉時代に寺域が形成されたことが明らかにされている。拝殿山の南西に伸びる尾根筋先端の丘陵上に寺域が展開し、伝本堂跡とされる礎石列は、円形の丘陵の中心のほぼ頂部に位置する。その北・西・南側には弧状の地形に沿って方形に区画された平坦面群が展開し、尾根が続いていく東側の寺域最高所には鎮守跡を設け、本堂跡を中心に放射状に寺域が広がる。また、平安時代中期成立の伝承がある高山市清峯寺旧境内では、基壇状の高まりを確認した本堂跡と思われる平坦面が尾根の西側斜面に位置し、その北・西・南側

に本堂跡を取り囲むように不定形な小平坦面群が展開する。また、本堂跡の東側には白山神社を設け、ここが寺域最高所に当たる。大威徳寺跡や清峯寺旧境内のような、本堂を中心に寺域が展開している事例は県の南・西部では確認できず、本県の山寺に関する地域性の1つとして提示した。

3点目は、特に西濃圏域において、古代成立の揖斐川町旧横藏寺跡や大垣市元円興寺跡、中世以降普及する直線参道を有した養老町柏尾廃寺跡や竜泉寺廃寺跡など、境内の遺存状態が良い寺院を多数確認したことである。このことは、本県における山寺の分布傾向の特徴といえる。

5. 課題と今後の展望

今回の総合調査では、いわゆる山寺の把握に特に尽力したが、限られた期間や予算の都合から、全ての山寺の資料化ができたわけではない。現地確認調査にて地域伝承でしか情報が残らない寺院の存在を確認したが、優先順位等の関係で作図できなかったり、CS立体図で不自然に平坦面が展開する場所を確認するも踏査できなかった場所もあった。これらについては、今後追加での調査や個別の資料化が望まれる。

また、山岳・巨岩信仰等の自然崇拜や磐座・石窟等の施設、神仏習合時の神社との関係や、經典や般若經等の文献史料及び仏像類の調査は、調査対象として十分に取り扱うことができなかった。1つの寺院の歴史を理解するためにも、岐阜県の佛教史を体系的に理解するためにもこれらは必要な視点である。今回の総合調査報告書を基礎資料として活用し、さらなる調査・研究に発展させていく必要がある。

今後の展望として、当初の調査目的の1つである開発事業計画等からの保護を行うため、新たに範囲を確認できた寺院を中心に周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図へ搭載し、埋蔵文化財としての保護を図ることが肝要である。また、一般の方への周知を目的に、以下のような普及活用事業を予定している。調査成果を県内市町村の埋蔵文化財担当者へ還元すべく、令和5年度中に地形観察図を作成した寺院の見学会として

「山寺ウォーク」を開催し、岐阜県の古刹と総合調査で確認した古代・中世寺院を紹介する観光ガイドマップの作成を予定している。さらに、令和6年度に県を挙げて実施する『清流の国ぎふ文化祭2024』では、調査成果を紹介する企画展や古代・中世寺院に関する報告会及び講座の開催を企画する。

以上、総合調査の概要について紹介してきた。調査を通じて実感したのは、寺院の状況は刻々と変化しているということである。自然災害や開発行為の影響を受けやすい山寺だけでなく、現存寺院についても後継者不足や経営困難等の問題を抱えており、実際に現地確認調査で訪れた寺院が解体の最中であるという状況も目の当たりにした。その中で、各寺院や地域で貴重なお話を聞くことができ、また優先順位をつけながらではあるが、悉皆的に調査・資料化を行うことができた。本調査の報告書が多方面で活用されれば、幸いである。

【註】

- 1) 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』岐阜県文化財保護センター調査報告書第162集
- 2) 大下永 2018「飛驒における中世山寺の空間構造について」『斐太紀』平成30年通秋季号
- 3) 藤岡英礼 2011「縄張り調査と山寺研究」『佛教藝術』317、毎日新聞社
- 4) 財団法人栗東市文化体育振興事業団 2005『忘れられた靈場をさぐる－栗東・湖南の山寺復元の試み－報告集』、栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団。財団法人栗東市文化体育振興事業団 2007『忘れられた靈場をさぐる2－山寺のうつりかわり－近江南部の山寺をさぐる 報告集』、栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団。財団法人栗東市文化体育振興事業団 2008『忘れられた靈場をさぐる3－近江における山寺の分布－報告集』、栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団
- 5) 久保智康 2001「古代山林寺院の空間構成」『古代』第110号、早稲田大学考古学会
- 6) 藤岡英礼 2012「空間構造」『季刊考古学』第121号、雄山閣